
俺と幼馴染とその他モブ(仮)

ふひひ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と幼馴染とその他モブ（仮）

【Nコード】

N8858U

【作者名】

ふひひ

【あらすじ】

主人公には幼馴染がいる。見た目は清楚系なのに天真爛漫な、そんな幼馴染。

主人公の周りには、個性的な奴がたくさんいる……つまりそういう事である。

日常系ほのぼの？コメディーなはず

幼馴染（前書き）

どうもひひです

どこかでお会いしたことが……ありませんね

幼馴染

「ユウ、十秒以内に起きて！早くしないと鈍器のような物を、股間に落とすから！」

「ッ！マジでやめてー！」

物騒な言葉によって目を覚ました俺は、眩しさに目をしかめながら、貴重な睡眠を妨げた人物を見て、ため息を付いた。

俺の名前は、たかうちゆうし高内悠志、とある公立高校に通う三年だ。

三年と言っても季節は春、つい先日四月になったばかりなので、学校はまだ始まっていない。

そして俺の事を『ユウ』と呼び、睡眠を妨げた奴が、同じ高校に通い、なおかつ隣の家に住んでいる、みいゆうな三井優奈、こちらも同じく三年である。ちなみに俺も優奈のことを、『ゆう』と呼ぶ。

現在、この部屋にいるのは、二人。ベッドで眠っていた俺と、俺に馬乗りになっている優奈だ。ちなみに優奈は、鈍器のようなものは所持していないようだ。ただの脅しらしい。

優奈は高校の制服に身を包み、俺をゆさゆさと、揺り動かしている。全くもって迷惑な奴だ。別に寝起きは悪くない方だと思っっているが、こんな脅迫じみた起こされ方は、ちょっと遠慮したい。

全く何をしに来たの ああ……。

………今、何時だ？ ヤバい、これはヤバい………なんとも言うが、マジでヤバい！俺の寝坊で地球がヤバい！？

焦っている、俺は猛烈に焦っている……それは、今日が始業式の日だということを、今しがた思い出したからだ。

寝起きであまり力の入らない身体に活を入れ、一気に跳ね起きる。優奈が馬乗りになっているが、そんなことを気にしている余裕など無い。

「うをお!?!」

俺が跳ね起きたせいで、優奈が、驚いたような声を上げた。

女の子だからといって『キヤア』とか、『ふえ〜』とか、『ぱしへろんだす』とか、そんな可愛らしい声を上げている方が間違えなのだ。驚いたら『うをお』という声が出るのだ。コレ常識。昨日寝る前に、学校の準備と目覚ましをセットして、二時前には寝たのだが、セットしたはずの、目覚ましの音にも反応できないくらい爆睡していたらしい。

目覚ましは四十分間鳴り続けるタイプなので、それが鳴り止んでいると考えると……もう嫌な予感しかない。

優奈が起に来てくれなかったら、初っ端から遅刻するどころか、学校をサボるところだった。寝癖は登校中に何とかしよう。

やばかった……高校最後の年、初っ端から、さぼりは避けたいものである。

起こし方が物騒だったが、助かったと思いつつ、優奈が侵入してきたと思われる窓を見やる。

まざまざと見せつけるように開け放たれた窓からは、朝の心地よい太陽の光が差し込んできて　はいなかった。そこには闇が広がっている……。

……完全に夜です。有難とうございました。

このヤロウー！　俺のドキドキを返せ！　まだ夜じゃねえか！　明るかったのは電気のおかげだったらしい。俺は脱力して、布団に倒れこんだ。本当に心臓に悪い。

「ゆづ、何故、起こしたし……」

「え？　高校最後の春に胸踊らせてたら、眠れなかったの！」

「遠足前の小学生か！」

「うっさいわね……グダグダ言わずに起きなさいよ！　ほらもう三時半！」

「早いわッ！」

優奈は、名前にあるような優しさなど微塵みじんも感じさせない、良い笑顔を浮かべ、四つん這いになりながら俺を上から覗のぞきこんだ。その距離三十センチ……顔が近い。

どうやら俺が寝ないよう監視するつもりらしい。

優奈の、少し癖のある髪が鼻をくすぐり、早く起きると催促するような視線と相まって、二度寝に入るのを妨害する。

優奈の性格を知らない人は、容姿から清楚なイメージを抱くようだが、そんなことはない、ただの、お転婆ワガママ娘だ。

「早く起きてよ！　私は暇なの」

「俺は寝ることに忙しい」

「寝るのなんて学校で出来るでしょ」

学校を何だと思ってるんだ？ まったく……これだけで、定期テストで、俺より成績いいのが納得行かない。

まあ……定期テストは、推薦を狙っていないのであれば、大して気にしなくていいような気がするし、結構どうでもいいのだけれど……赤点にさえ気をつければ。

さて寝るとしよう。

「なんで寝ようとしてるのよ！ さっきから起きてって、言ってるでしょ！」

「初耳」

「……ユウがそういう態度なら、こっちにだって考えがあるもんね」

優奈はそう言うと、俺の上から立ち退き、開け放たれた窓から、自分の部屋へと戻っていった。

さて、起きるとしようか……。優奈の悪巧みが、もうすぐその身に迫っていることを知っておきながら、受身にまわるほど俺はMではない。

ベットから降りて、少し寝ぐせの付いた髪を撫で付けていると、優奈が油性ペンを両手に抱え戻ってきた。

「何で起きてんのよ！ 寝てていいよって言ったじゃん！」

「言ってるねえから！」

「言ったし！ 二千回くらい言ったし！ その間に地球三回くらい回ったし！」

三日かけて何やってんの？ 暇人か！

「一度たりとも聞いてない」

「聞いてない？ 違うよ、ユウにはちゃんと聞こえてたはず……私はずっと語りかけてたユウの精神に、その心に……わかる？ これがテレパシー、私とあなたのシンパシー……そして貴方はチンパンジー」

「おい……最後なんかおかしなこと言った」

「気のせいじゃないかな？ 誰もインキンタムシなんて言ってないよ」

「そうだな……たしかに言ってない」

「どうやら気のせいらしい……オカシイナ、耳くそ詰まってんのか？」

「全く、人がせつかくお化粧してあげようと思ってたのに……」

「それ、化粧道具やない……おはじきや！」

「……頭、大丈夫？ これ油性ペン……わかる？ 油性ペン」

まさか、頭の心配をされるとは思わなかったぜ……ひどく心が傷ついた。

「お？ 油性ペン？ 知らないデスネー」

「油性ペン……化粧に使うオーケイ？」

「しれっと嘘つくな！」

優奈は外国人に間違った日本語を教えるタイプの人間だ。挨拶がわりに、チン毛、チン毛言ってる外国人がいたら、それは優奈のせいだろう。間違えない。

「知ってるなら最初から知ってるって言いなさいよ」

最初から騙そうとするなど……小一時間問いつめたい。

「常識的に考えて知ってるだろ」
「常識など虫けらの如く地を這いながら、私に蹂躪されるがいい。
って偉い人が言ってた」

誰だよ！ そんな物騒なことを言った奴は！？ 常識がリンチにあっている姿が幻視できそうだ。

「もう少し常識に対して優しさを持つとか」
「私、もの凄く優しい。みんな知ってる。これ常識」

どんな常識だ。どの口が自分のことを優しいとか言うのだろうか……この優しさは、一般的に見てとか、常識的に考えてではないことは確かである。

「どこが？ 何を基準にしたら、優しいことになるんだ？」

「え？ マザーテレサとか？」

「そのふてぶてしさに、驚きを隠せねえよ！」

「えへへ……テレル」

「褒めてねえから！」

真夜中に起こされた挙句、俺は何をしているんだろうと思わなくもないが、起きてしまったものは仕方ない、今更寝ようとも思わない。

俺は何だかんだ言って、優奈の我がままが嫌いではないのだから。

幼馴染（後書き）

感想、ご意見、文句、バッシング、何でも受け付けております。

幼馴染（前書き）

都市伝説、幼馴染

私は恋人は、都市伝説だと思っています！！

幼馴染

『幼馴染おさなじみなど都市伝説だ！』

これは、全国の幼馴染がいない者が、最終的にたどり着く悟りさとである。これを悟った後、約四割が妹萌に走ると言われている。事実確認はしていないが、そういうものらしい。

逆に、持つ者は、思春期と呼ばれる時期に、幼馴染との仲が疎遠になってしまうことがあるようで、素直になりたいのに、素直になれない、だがそれがイイらしい。この人たちの気持は良くわからない。

そして、それらの困難を乗り越え、幼馴染と疎遠にならなかつた者には、幼馴染との関係をもう一步進めるがために、アタックを仕掛ける強者つわものたちもいる。

持つ者と持たざる者、そして素直に成れない者、どうも、この三者には大きな差があるらしい。

そして、俺と優奈の関係は、幼馴染というやつだ。

俺と優奈の家は、隣同士であり、親どろしが比較的と言うより、かなり仲が良い。親父同士は飲み友達であり、母親同士は、幼馴染らしい。

そんな環境で、同時期に子どもが生まれたとなれば、幼馴染にならないほうが逆におかしいのだろう。

現に、幼馴染関係は今でも続いていて、今日も部屋に侵入されたわけだ。

戸締まりの必要性をひしひしと感じるが、戸締りしていても、優奈はうちの合鍵を持っているので、結局侵入されるのだ……」悠志の監視をよろしくね!』と俺の母親から言われて、合鍵を渡されたらしい。

なんとという親だろうか……もう少し息子を信じてくれても、いいのではないだろうか、思わずにはいれない。監視されるほど、悪いことはやってないはずである。

まあそんな事言っただけはいるが、俺の方も優奈の家の合鍵を貰っている、なんとも言えないのだが。

俺の両親もだが、優奈の両親も、仕事で家を空けていることが多い。これが合鍵の原因だと思う。つまり助け合えということらしい。親が忙しいと、俺と優奈のような一人っ子は、微妙に苦労するのだ。

なんとも投げやりな親たちだと思うが、仕事が忙しいのは仕方のないことである。おかげで色々自由にさせてもらっている、文句は言えない。

慣れれば簡単だが、家事はなかなか大変なもので、一人分ずつやるのはものすごく作業効率が悪いし、無駄が多く出る。料理、洗濯、一人分ずつなんてやっていた日には、ストレスで気絶してしまっただろう。

多少大げさだが、そんなこんなで、食事の準備など、まとめてやれるものは一緒にやり、仲良く? 家事を分担している。

これが、幼馴染と疎遠にならなかった理由の一つかもしれない。

幼馴染（後書き）

書き溜めが消えてゆく……いやあああ！……！

幼馴染（前書き）

……アヴァバババウヒヒ

幼馴染

優奈に起こされた俺は、その後、夜中からゲームをするはめになった。

やっているのはレースゲームなのだが、さつきから優奈の頭が邪魔で画面が良く見えないのだ。と言うより、抜かれそうになったら邪魔をしに来るといったほうがいいだろうか。

最初、優奈は俺の隣で、ゲームをやっていた。

しかし、次第に隣から正面へとその位置を変え、とうとう俺のゲームの妨害するようになってきたのだ。これは一度抗議しないといけない

「ゆう、画面見えない」

「気のせいだと思うよ!」

どうも気のせいらしい……納得がいかない。

「もう一度繰り返し返す……画面が見えない」

「負けられない戦いがあるのよ!」

本音を吐きやがった! だがそれはこちらとて同じ、妨害には妨害を持って応じようではないか!

手始めに、優奈のお腹あたりを両足で挟んで固定することにする。まるでカニバサミ……コレだけでゲームを有利に進められる。

「ちょ、ユウ卑怯だつて! 私が妨害できないじゃん!」

「妨害すること前提かよ!」

「そういうゲームでしょ！」

違うから！ 優奈は足の間でジタバタと暴れだした。ゲームより抜け出すことに必死である……おい、コントローラー投げるな！

「ちょ、暴れんな」

「だったら、この足をどけなさい！」

「お断りします！」

優奈は身体を右に左にとひねる。俺はコントローラーで両手がふさがっているため、足の力だけで何とかしようとするが、体をひねる動きを阻止することは、不可能に近い。

コントローラーさえも放棄している優奈は、ついに身体を半回転させてしまった。うわ……とてもいい笑顔をしていらっしやる。

「ああ……優奈さんこんばんは！」

「さあ、そのコントローラーを渡しなさい！」

「お断りします！」

傍から見たら、優奈が俺を押し倒しているように見えなくもなさそうだ……まあ傍観者がいないから全く関係はない。

……レースは、あと一周回れば俺の勝ちなのだ。ここまで来て負けられない。さてどうするか。どこかに勝利への道があるはずだ……。

高速で頭を回転させる……その間にも優奈の攻撃が続く。何とか腕の長さというアドバンテージにより、コントローラーを取られないでいるが、ギリ貧だ。もう、すぐそこまで優奈の手が迫ってきている。考える俺。

……フハハハ……見つけてしまった！ 優奈の手の届かない場所、勝利への道を。

コントローラーを優奈の背中側で操作すればいい！ 人間、背中側に手は届かない。完璧だ！ まあ、見た目抱き合っているようにしか見えないだろうが、今は勝つことが先決である。

「小癩な……卑怯よ！ 私のおっぱい揉む権利あげるから離せ！」

優奈は、自分の胸を手で覆いながら、抗議の声をあげる。これが手ブラという奴である。まあ服を着ているのでなんとも言えない。

だが、抗議と共に譲歩案も持ち出すとは……なかなかのやり手である。

「非常に魅力的だが、お断りだ！」

「Dよ！ D65！ なかなかの美乳だと自負してる」

「当たり前だろうが、俺が育てたからな……」

「えっ？ いつのまに？」

「栄養管理をしっかりとって、太らせもせず、痩せさせもせず、そういう乳に私はなりたい……そう、つまり貴様の乳は俺によって造られた、量産型なのだよ！」

つまり、コレが管理栄養……ゴメンなさい嘘です。

「私の胸が量産型！？ そんな……認めない！」

優奈は俺の腕の中でギヤアギヤアと文句を垂れている……。いくら文句を言ったところでもう俺の勝ち揺るがないのッ！ 俺の胸を揉むな！ いくら揉んでも大きくなるから。

「ちよ、くすぐりたいからヤメて」

「胸筋から力抜きなさい！ 柔らかくないじゃない！」
「お断りします！」

鍛えて良かった大胸筋！ 思わぬところで役に立った。コレが日々鍛えている成果というものか……あまり嬉しくない。

優奈はその後もしばらくバタバタと暴れ続けたが、一分もすると疲れたようで、動きが鈍くなってきた。

「ユウのせいで疲れた。ゲームしてたら眠くなってきたし……学校もあるから寝ないと……おやすみー」

諦めたようだ……だからと言って、人の上で寝始めるのはやめてほしい。俺が動けなくなる。それにもうゲームはいいのか？

相変わらず自由な奴である……全く、数時間前の自分の行動を思い返してもらいたい。

しかし、残念ながらら寝ている暇など無いのだ。現在、六時。今日は、八時二十分からのショートホームルームに、間に合えばいいので、今の時間帯が朝食を作り始めるのに良い時間だ。

学校まで、電車と徒歩合わせて、約一時間の登校時間を考えると、そんなに余裕があるわけでもない。

いつもであれば、朝課外という七時半から始まる授業があるので、もっと早起きをしなければいけない。一応、進学校ではあるので仕方が無いといえば仕方が無い。

それを考えると、今日は少しぐんと遅い時間なのだ。

「ゆう、起きろ、残念ながらもう寝てる暇はない」

「え？ ……なんで？」

優奈は、もそもそと起き上がりながら聞いてくる。

これは本気で分かっているのだからか……可能性はなきにしもあらずだ。

「貴様の心に聞け」

「ん……ダメね、心臓の音しか聞こえない」

こいつは絶対分かってやっている。間違えない……俺にノストラダムスがそう告げている。そんな気がするのだ。

慌けるのであれば、こっちにも考えがある。

「え？ ちょっと何言ってるのかわからないですね……フランス語ばかり言ってもらえます？」

「シンゾウデ、ボンジュール？」

「……ボンジュール付いたら全て解決、っていう考えを改めたほうがいい」

「なによ！ じゃあ、ユウだったらどう言つのよ？」

「シンゾウ・ドウ・マドモワゼル？」

「クツ！ ……やるじゃん」

自分で言うのも何だが、さっぱり意味が分からない。だが優奈の中で、ある一定の基準に達したらしい。かなり悔しそうだ。

「まあいいや……御飯作るの手伝って」

「嫌だ！」

即効で拒否られるとは思わなかった。こんな子に育てた覚えはない。

「何だよ！　そこは手伝えよ」

「全く、口うるさいマドモワールね」

意味を、分かって使っているのかさえも謎である。

マドモワール、未婚の女性に対する敬称。いや確かに未婚だけれども……。

「マドモワールじゃねえし」

「え？　女じゃないって証拠がどこにあるのよ！　どうよ無いでしょ？　どうなのよ」

意味は知ってたらしい。証拠を見せると……分かりやすいのは嫌いじゃない！

「しかたねえな……」

我が肉体美を、魅せつける時が来たようだ。

鍛え抜かれた海綿体を見るがいい！

「お巡りさんこっちです！　此処に露出狂が」

「狂ってねえよ」

「露出は認めるのね……六時二分逮捕！」

ちくしょう、まだ脱いでないのに。……こんなことをしている暇などなかった。

「誰かさんのお陰で無駄な時間を……」

アホなことに時間を取られたせいで、今日の朝食からおかずがー

品消えた。

「人に責任を擦り付けるなんて、仕方のない坊やね」

「坊やじゃねえよ！」

「だったら証拠を見せなさい」

「しかたねえな……」

鍛え抜かれた海綿体を……。

「……脱いだら全て解決、っていう考えを改めたほうがいい」

そんな考え持つてねえよ！ 脱いだら全て解決ってなんだよ……抱きしめてキスしたらすべて解決、みたいな言い方しないで欲しい。そんなスイーツな考えは持つていない。

むしろ脱いだ瞬間に、状況を悪化させかねない。

全く人を変態か、それに似た何かだと勘違いしてやがる。

「……じゃあ、ゆうだったらどうするんだ？」

「ん？ しかたないなあ……」

優奈はスカートの上端をつまみ、スルスルと上へと上げていく。サイハイソックスとスカートによって、絶妙なバランスを保っていた絶対領域が崩壊し、理想的な喰い込み、そして、程良く肉のついた柔らかそうな真っ白な太ももが、少しずつ顕になる。

勘違いしないでいただきたいのは、俺が変態でないということと、オーバーニーではなく、サイハイソックスであるということである。違いがわからない？ 勉強しなさい。

しかし、目に毒である。

「お巡りさん！ 此処に露出女が！」

幼馴染（後書き）

ハアハアハア……ふう……

キモいと言わないでー！

幼馴染（前書き）

フハハハはハハハアイツはウルトラウーマン！！！

幼馴染

「ユウのせいで、完璧遅刻じゃない!」

責任転嫁のプロがここにいる。

「いやいや、明らかに俺、悪くない」

結局、あの後も収まりがつかず、ふざけ合っていたため、完璧に合わない時間になってしまった。初っ端から、走って登校するはめになるとは……先行きが不安だ。

この調子で走ってゆけば、三十分程度の遅刻で済む筈だが、そうなれば、始業式の途中に乱入する形になるだろう。説教を聞くはめになると思うと、ため息が出てしまう。

それに、クラス分けもまだ見てないというのに……前途多難だ。電車を一本乗り過ぎたのが痛かった。

優奈の方は、ぶつぶつと文句をたれながらも、顔がニヤ付いている所を見ると、悪びれる気はないようだ。優奈らしいといえば、優奈らしいのだが。

「早く起こしてあげたのに、人の好意を無駄にして、これだからマトモワールは……」

「まだ言うか……しかも何が好意だよ、完璧に悪意だろ」

「私の優しさがわからないとか、喉に刺さった小骨が、取れなくなる呪いにかかってしまえ」

「地味に嫌だな」

効果的には微妙であるが、もし本当にあるのであれば、術者の性格の悪さが伺える呪いである。別に、優奈の性格が悪いと言っているわけではない。

優奈は少し悪乗りが好きだけだと信じている……いや、切なる願いだ。

しばらく走っていると、優奈が音を上げた。

「ユウ……胃の中がシェイクされているのを感じる……味噌汁の産声が聞こえる」

「幻聴だ！ 時間ないのに、普通に朝食食ったからだろ、食後に走ればそうなる」

俺の胃の中の内容物も、走るたびに揺れる。別に気持ち悪くはないので、大丈夫なのだけれど。もう少し、隙間なく詰めるべきだったかもしれない……。腹八分目最強説、こいつは間違えだ。残り二分、詰め込むべし！ そうしたら揺れないはずだ。

「ユウはなんで余裕そうなのよ！ 不公平よ！」

「格差だよ、俺のほうが格上だった。簡単なことだろ？」

「なんか腹立つわね……まるでブルジョワのようだ」

「ブルジョワになんか恨みあんの？ ……まあいいや、歩くか。走っても間に合わねえし」

意外と余裕そうだが、優奈の胃の中は、パニックに陥っているのだろう。

「ご飯と味噌汁が混ざり合い、焼き鮭と玉子焼きが入り乱れる。そしてトドメの牛乳である。」

それが走ったことにより、さらに混ぜ合わされ……これ以上想像するのは止めておこう。こちらまで気分が悪くなりそうだ。

そんなことを想像している間に、優奈は状態異常を回復したらしい。なかなか立ち直るのが早い。

「流石、ラマーズ法……半端ない」

……意味の分からないことを曰^{のたま}っている。隣でヒイヒイ聞こえると思えば……ラマーズ法を実践していたらしい。

「いやいや、ラマーズそんなに万能じゃないから」

「はあ？ ラマーさんデイスってんの！？ ラマーに謝りなさい！」

「誰だよ！？ ラマーって」

俺の知っているラマーズ法とは、どうも違うらしい。ヒッヒッフーの呼吸によって、分娩時の痛みを和らげる呼吸法だと記憶していたが……。

詳しくはよく知らないが、うんこする時にでも練習してみたらいいと思う。

「しかたないなあ……ラマーの伝説を教えてあげる。」

「いや、べつにいいよ」

「むかーし、むかーしある所にラマー三兄弟という仲の良い兄弟が住んでおった……そう三人揃ってラマーズである」

望んでもいないのに、謎の昔話が始まった……これは長くなりそうだ。

「ほうほう……それでそれで？」

適度な相槌は、コミュニケーションを円滑にするために重要である。

これは誰の言葉だったか……だが、間違った相槌は、コミュニケーションを崩壊させる危険性もはらんでいる。今回の相槌は、なかなかのものだと自負しているが、どうだろうか。結構イラッとくる相槌だと思う。

「お婆さんは山へ竜種の討伐に、お爺さんは夜の街へと颯爽と消えてゆきました」

……ん？ いきなりラマー兄弟が消えた！？ しかも爺さん働く気ねえ……。

お婆さんアクティブすぎるだろ。お爺さんと一緒に夜の街へと繰り出すか、おとなしく川に洗濯へ行ったらいいのに。

「お婆さんが山へつくと、そこには伝説の古代龍、ラマー兄弟がいました。ラマーは言います。『人間よ何しに来た？』と」

急展開過ぎる……ラマー兄弟、古代竜だったのか……しかも語りに熱が入り始めている。

「お婆さんは言いました。『人間？ そんなモノと一緒にしないでくれる？ マジでチョベリバ……つまり何が言いたいかというと……わたしや、ババアだよ！』と」

「何なのこのバアさん……流行意識したのかもしれないけど、バブル崩壊あたりに取り残されてるからね？ しかも何、ババア認定してもらおうとしてるの？」

「ババア馬鹿にしてんじゃないわよ！　そういう外見だけじゃなくて、内面も評価して欲しいのが、最近のババアなのよー！！　職業欄には冒険者、ババア、アマゾネスってちゃんと書いてあるんだから！」

「ババアって職業だったの？」

「名誉職、ババアって知らないの？　常識ないわね……」

名誉職、ババア……名義上の職業であるババアのことだが、名義上のババアということは……ババアというのは、仮の姿、本来の姿を隠すための仮初の存在？　つまりババアであるが、ババアではない。……それはババアを超越したババアである……自分で言っておいてなんだが、意味が分からない。

「え？　名誉職、ババアだろ？　し、知ってるに決まってんだろ！　常識だよ〜これ知らないとか常識疑うわ〜」

「えっ！？　マジで？」

「えっ！？」

もう嫌だこいつ……もう疲れたよアマゾネス……君が強いことは十分理解した。

「でね……えつと、私、どこまで話した？」

「……お爺さんがホストになった辺り」

ぜひこれで軌道修正してくれることを願う。頼んだぞお爺さん！

「ん？　そうだったわね……しばらく経ったある日、お婆さんが、ホストクラブ、アマゾネスへと来店、お爺さんを指名し、ドンペリを頼みました」

成功した？……ようだ。

ホストクラブにアマゾネスは無いと思うんだけどな……お爺さん、ちゃんと働いてて安心した。

「すると、どこからとも無く自称、伝説のホスト、ラマー兄弟がやって来て、お爺さんに言いました。『今日からお前が、伝説だ！』と」

ラマー……兄弟揃って何やってんだか……。自称、伝説のホストとか……存在自体が痛すぎる。

「お爺さんは言いました。『伝説？^{レジェンド} そんなモノにされちゃ困るんじゃないよ！ こちとて、今を生きるジジイなんじゃ！』と」
「カツコイイじゃねえか！」

この爺、老いぼれてなお、青春を送るとは……一般人にはなかなか出来ることではない……リア充だな。

「でしょ！ つまりね……あっ、コンビニ寄ろうよ」

中途半端なところで話が終わってしまった。

だが、別に続きが気にならない。どれだけ中身のない会話をしていたのかを、思い知らせてくれる。中身のない会話、最高だ！！

「ん……そうだな俺、ピザまん買う」

「じゃあ、私、肉まん」

「また、気持ち悪くなるぞ」

「甘いわね……走らなきゃいいのよ……」

左手でお腹をさすりながら、優奈はサムズアップする。

太るぞと言いつうになるが、口には出さない。今日の夕飯の献立を考え直すか……いや、夜にでも走らせよう。五キロか十キロ程度、走らせればいいだろう。これが優しさって奴だと思う。

「遅刻しているという自覚がねえな」

「宇宙の歴史から考えれば、そんなもの誤差にすぎない」

「スケールでかいな」

「私の器は、三十センチ物差しを持ってこないと測れないわよ」

「うわぁ……シヨボい」

「シヨボい、いうな!!」

優奈とくだらない話をしながら、通学路の途中にあるコンビニへと向かう。

パンがおいしいと評判のコンビニだ。正直そこまでおいしいとは思わない。どちらかというと『いらっしやいませ』をまともに言う気のない店員が、評判のコンビニだと思う。

「ッシエ〜!!」

でた！ 誰がどう聞いてもいらっしやいませには聞こえない。どう見てもラーメン屋のノリだ。

此処で、チャーハンいかがですか？ などという言葉が聞こえた日には、ラーメン屋に来たと錯覚するかもしれない。

「フウ〜レイドチエケンいかがですかあ？ 今なら百三十イェン」
「！」

ヤメてくれ!! その発音、絶対間違ってる！

「フレイドポオ〜テウトオ〜百イエン！ おでん、タメエゴ〜五十
イエン！ …… あっ白滝きれてんじゃん」

まともな日本語、最初から喋れよ！

幼馴染（後書き）

ふう……ヒヤ〜ハア〜

幼馴染（前書き）

幼馴染の章ラストですw w

次は新しいクラスの章ですかね？

聞かれても知らんと……スイマセン

幼馴染

「ユウ、はいこれ」

「ほれ……」

中華まんを半分にして交換する。二種類の味を楽しむことが出来るという、最高の食べ方だ。

優奈は俺から受け取ったピザまんを見て、抗議の声をあげた。

「具をよこせ！！ 具を」

「チツ……バレたか」

具の入っていない、皮だけの中華まんを渡したのだが、お気に召さなかったらしい。

軽く色が付いているので、味がしないこともないだろう。つまり、問題はない筈である。

「今舌打ちした！！ 舌打ち！！」

「鳥のさえずりだよ、早とちりは、ダメ絶対」

「何だ鳥か、じゃあ仕方がない……と言つとでも思つたかッ！」

「ん？ なにか言った？ この肉まん、ソコソコ美味いぞ」

「あ、本当だ……ッて、ド畜生が！」

「どっ、どっ、どっ、もっ少しお淑やかに出来ないのかね、君は？」
「出来ない！！」

断言ですか……ギャーギャーと耳元で騒ぎ立てるせいで、耳が痛

い。鼓膜が破けたら謝罪と賠償を要求するぞマジで……ん？

「俺のピザまんの具が、無くなった件について」

「ふおふえ……んっ。とても美味しゅうございました」

「あらとつても、お淑やかー！！　おい、返せ！　俺のピザまん」

俺がよそ見をしている間に、かぶり付いたらしい……残った皮に、しっかりと歯型が付いている。

「ケチケチ、するものじゃないと思いますの」

「じゃあ、その肉まんをくれ」

「いやですの」

「ドケチー！！」

「ドケチで結構コケコッコですのー！！」

コケコッコとか言う奴を久々に見た気がする。ほとんど死語だ
と思うが、どうなんだろうか？

「ハイ！　チキンガール、その肉まんプリーズ」

「アーハ？　オー、グッドテイスト肉まん。ハッハッハア」

「肉まんをよこせ」

「嫌だ……唾をつける攻撃。ペッペッ！」

「ちょ……やメ」

肉まんが唾で汚染される……実際そんなに、唾は飛んでいないと
思うが、精神衛生上問題がある気がする。

「これでマーキングは完了……」

「問題ない、とつとと寄せ」

「アラヤダ、この人、キモイ」

イラ …… 実力行使に出るとしよう。手をムチのようにしならせ、肉まんを掠め取ると見せかけ、足を引っ掛ける。

「遅い！ 遅すぎる！ まるで止まって見えぬわッ！」

優奈はバランス崩した。体制を立て直すために必死で腕をふりまわしている。だが、その結果、持っていた肉まんはその手を離れ、宙に放り出された。

誰もが放物線を描いて地面に落下する肉まんを幻視しただろう。地面に叩きつけられ、無残な姿をした肉まん …… 誰がそんな未来を望んだのだろうか、いや誰も望んではない。

アスファルトの上、そこは三秒ルール適応範囲外、落ちてしまつたら最後、泥や砂がめり込み、見るも無残な姿へと変わってしまうだろう。そこには一切の例外などはなく …… テーブルの上や床に落としたのとは話が違つのだ。

特殊ルールやローカルルール、または時間延長などといった、甘えは許されない。

俺に食されるはずだった肉まんが、不遇の死を迎えようとしている。だがそんなことを俺が許すはずがない、神が許しても俺は許さない、絶対にだ。

肉まんは優奈の手から毎秒五メートルのスピードで射出される。肉まんの肉汁が太陽の光を反射し、キラリと光る。それは神々しいまでの魅力を放ち、俺を魅了した。

それは反射……脳がその映像を理解し、命令を下す一般的な動きを超越した反応だった。

まさに神業、人間の所業ではないと自画自賛しておこう。この間コンマ三秒、人間の限界を超えてしまったかもしれない。俺は体勢を少し崩しながらも、肉まんを掴みとったのだ！

そして、視界の端に映るのは、必死にバランスを取ろうとしている優奈《負け犬》、溺れる者は藁をもつかむと言うがまさにその通りで、空気を掴もうとしている。

転けて怪我をされると困るので、お腹に手を回し、抱える。なんとも情けない格好であるが転けて怪我するよりかはいいだろう。

「あれ？ 太った？」

「ふ、太ってないわッ！」

怪しい……フニフニとしたお腹の感触がする。自分のお腹では、この感触は得られない、なかなかのもんです。

「はくなあゝせ！」

「ああゝ重いと思ったら、ゆうだったのか」

「誰がこぶとりかッ！」

「イヤイヤ、そんなこと一言も言ってない」

「まあね……私スレンダーだし」

「立ち直り早いのか」

「まふあね……んっ。ごちそうさまでした」

「俺の肉まんが喰われた件について」

「え？ 誰が肉だるま？」

「そんな事言つてねえよ！」

「マーキングしたものは、本人のもとに帰ってくる法則……俗にい
う中華まんマーキング則ね」

「そんな法則ねえよ！！」

「これ知らないとか常識ないわね」

「もうそのネタには付き合わねえぞコラ」

「えっ！？ マジで？」

「えっ！？ 何故驚くし」

学校が見えてきた……クラス替えはどうなっているのか……楽し
みである。高校生活最後の年、楽しくなりそうな予感がする。

「うえ……ゲップでそう」

「吐くなよ」

「エチケット袋の貯蔵は十分か？」

「意味わかんねえよ」

訂正する……前途多難である。

幼馴染（後書き）

ううゲップでそう……げえええ

新しいクラス（前書き）

しばらく更新が滞りましたが、ぼちぼちやっけていこうと思います

新しいクラス

私と悠志は、結局一時間程度の遅刻で、学校に着くことができた。一時間ですんだのは、最高学年としての自覚が出てきたからかもしれない。

いつもだったら、昼休みから登校だとか……あきらめて家に帰るといふことが多い。

周りには、出席日数の心配をされるけれど、私はカケラも心配などしていない。悠志がカウントし、休みの管理をしているので、土壇場になって出席が足りないなんて事など起こりえないし、そんなことを悠志がするわけがない。

悠志曰く、全教科、あと一時間ずつサボれる余裕を残して、一年間を終えるのが、一番美しいサボり方らしい。

推薦なんてものを最初から狙う気のない私には、これくらいがちょうどいいのだ。

生徒昇降口近くの掲示板に、クラス分けが張り出されている。

下駄箱にローファーを押し込み、学年の色である緑の、色々な落書きのされた、スリッパを引っ掛けながらクラス分けの掲示へと駆ける。

この学校は一学年、八クラスあり、一組から四組までが文系である。その中でも私大進学、就職志望と国公立大進学志望にわかれたクラス編成がなされており、私と悠志は国公立大学進学志望である。

この国公立大進学志望は、一組と二組が割り当てられている。つ

まり、私は一組と二組を見ればいいのだ。

一組から調べる、原田洋子……樋口武人……福山正晴……なかなか惜しいやつだ……本田雅也……宮下智奈美……『三井優奈』はなかった。つまり私は二組のようだ。念のため二組を確認してみる。

……浜口妙……日野太一……堀内佳代……間宮信子……宮崎伸治……あれ？ 『三井優奈』が二組にもない……もしかして忘れ去られた？

「ユウ！ 私の名前がない……どうしよう」

私は、ノロノロとこちらに近づいてくる悠志に助けを求めた。

「は？ ああなるほど……諦める」

クズだ……クズが此処にいる！ 悠志の口から飛び出した言葉は、慰めなんかではなかった。

「薄情者！ この……このツ学ラン野郎！」

「それ悪口でもなんでもないから……ちなみにそこ、二年のクラス分け、三年こっちな」

「え？ ああ……し、知ってたし！ 結構前からそうじゃないかと、第六感周辺にビシバシきてたし！」

「第六感の周辺に何があるんだよ」

「電波塔とか？」

「ただの電波さんじゃねえか！」

そんな痛い子と一緒にしないで欲しい。私は至ってまともである。

「さて気を取り直して……何組か」

「えっと……ああ、ゆうは「ダアーメツ！」」

ネタバレ、ダメ絶対……悠志はネタバレを全く気にしないという、信じられない特殊性癖を持っているが、私はそんな性癖はない。

下駄箱から走ってきたのは、悠志より先にクラス分けを見るためだったのに……結局無駄骨になってしまった。悠志は、ういういと気のない返事をしながら、クラス分けを眺めている。これでネタバレの心配はないだろう。

今度こそどのクラスなのか、知ることが出来る。何故だかわからないが無駄に緊張するのは私だけではないだろう。『三井優奈』……。

「ドキドキ、ドキドキ、ドキド……ピーー心肺停止」

「うっさいわッ！」

横から悠志が煽ってくる、腹ただしいやつだ。

「ハッハッハ……ちなみに俺、二組な」

悠志は、二組らしい……私はどうだろうか……。

「あつた！ 二組！ やつた……あつ、奈緒もいる！」

「ああ……ハムもいるな……うわぁ……エセヤンキー達いるじゃん、めんどくせェ」

奈緒というのは、小学生の頃からの友達である、『椎名奈緒』。

小四から、かれこれ七年の付き合いになる。悠志とも結構仲がいい。

そして、悠志が言うハムというのが、本名、『霧島公太』通称、ハムだ。悠志の中学の頃からの友達で、なんというか、残念なやつ。

エセヤンキーというのは、よくわからない。名前を聞けばわかるかもしれないが。

「エセヤンキーって誰？」

「え？ 吉井ノブ……何とかと、後藤何とか……名前がよくわからん」

名前を覚えていないらしい、何気に失礼なやつである。

「……え？ なんか身体的特徴で」

「前髪だけ縮毛の天パ……ジャラジャラ腰パンと、眉なしチューインガム男」

「ああ……アレか、私も名前知らないや……確かに面倒……臭い」

香水的な意味で。このエセヤンキーは……一応進学校であるこの高校で、なぜか活きがってしまった残念な男たちである。

これは私の考えなので、学校全体の意見として当てはめることはできないけれど、少なくとも、悠志の言う、エセヤンキーというのは、納得した。

たぶん、そのエセつぷりを、今年いかん無く魅せつけてくれるのだろう。もし、悠志にウザ絡みをした日には、化けの皮どころか、筋肉あたりまでそぎ落とされるに違いない。私に絡んできたら、悠志に丸投げしよう。

「教室に行くか……三年棟はあつちか」

「もう始業式始まつてる系？」

「たぶんな……荷物置いたら体育館か……めんどろだな」

「たしかに……そういえば、高校の入学式の時も遅刻したよね？ 私たち」

「入学早々、生徒指導……まじないわ。遅刻の原因は……ゆづの寝坊だったろ？」

「まあそうだけど、生徒指導の原因は、ユウが、体育館に入って早々『臭すぎだろ、これ人間の匂いじゃないから……入学式は諦めよう』なんて言うからでしょ！」

「もう少し小声で言えばよかったな……アレは反省してる」

そういう問題ではない気がするが……今更である。実際、臭かったのだからまあ仕方がない、間違った香水の付け方をする人は、滅びたらしいと思う。

悠志は、香水が苦手で、喉に乳酸飲料を飲んだ後のような違和感が出るらしい。なんとも言えない微妙な違和感である。確かに、確かに、なんか嫌な感じだけれども……。

そうこうしているうちに、教室についた。出席番号的に自分の席でありそうな場所に荷物を放置し、体育館へと向かいながら、悠志と話し合う。

「始業式どうやって侵入するよ？」

「正々堂々と……やっぱり目立つかな？」

「間違えなく目立つ……伝統的な稲作をしている村で、一人だけコンバインを使うくらい目立つ」

「ヤバいわね……間違えなく村八分」

「埼玉では、よくあること」

「埼玉を何だと思ってるのよー！」

「最近の埼玉ヤバいんだぞ……何かしら……ほら色々、もろもろ……ね？」

「ね？ でわかるか！」

別に埼玉を擁護するわけではないが、たぶんいい場所だと思う。行ったこと無いけど……。

「どうするかね……」

「ユウが囿になっている隙に、私が入ると言う案を提案する」

「だめだな……配役的に逆だと完璧なんだが？ どうだろう」

「欠陥だらけだから！」

意見がまとまらない、それ以前に話し合う気がない。もう始業式はサボっていいような雰囲気私たちが間に流れている。これはもうサボるしか無いのではないだろうか？

「諦めようよ」

「気が合うな、俺もそう思ってた」

「ハハハハ」

傍から見たらただの変人、いやダメ人間だ。

「屋上行くか」

「鍵持ってる？」

「マスターキーならココにありますですよ」

悠志がふざけた口調で一本の鍵を取り出す。

これは、悠志が一年の時、体育倉庫の鍵を返すついでに、型取りをして、プラp……造形補修剤を使い複製したのだ。

この学校の、ズサンな鍵管理のおかげである。

「ふああ……眠くなってきた」

悠志はあくびをしながら伸びをする。そう言えば私も昨日は寝ていない。そのことに気づくとなんだか眠くなってくる。私は、屋上で仮眠を取ることを決意し、悠志と肩を並べて屋上へと向かった。

新しいクラス（後書き）

げに疲れき、いとワロスWWW
WWW

新しいクラス（前書き）

マカダミアナッツ！ 君とナッツ！

wow〰マカダミアナッツ！ それがナッツ！ Y e y

Hey〰と歌っていたら、たいそう不審なものを見るような目で、
野良猫が目の前を通り過ぎて行きました

新しいクラス

悠志と雑談をしながら廊下を歩く、校内は、人がいないせいかな静まり返っていて、無駄に声が反響している気がした。

『ヤッホー』と叫んだら『ウツサーぞコラ!』と、ヤマビコか何かが返ってくるかもしれない雰囲気、醸し出している。実に愉快だ。

「こんなに静かだと、なにか出そう……」

「ああ……妖怪、山の子リスあたりが出そうだな」

「また微妙なチョイスしたわね……」

「上手にヴァイオリンを弾くんだぜ……ホラーだろ」

「子供が泣き出すのは間違えないわね」

悠志がスリッパで、キュキュツと音を鳴らす。山の子リスの演奏のつもりらしい。無駄に器用なことをする。

「うわぁ……スリッパの底が擦れた……山の子リス、死刑だな」

「冤罪!?!」

罪のない山の子リスに死刑が言い渡された。

そんなくだらない話をしながら、保健室の前を通る。去年は結構お世話になった……冬場や、真夏は此処で良く暇つぶしをしたものである。室温が適度な温度に保ってあるので居心地がいいのだ。今年もまたお世話になることだろう……そんなことを思いつつ保健室

の前を素通りしようとした時、ガラッと

ドアが開き、中から保健の先生が出てきてしまった。

私は悠志と顔を見合わせ、ニヤリと笑う。この瞬間から、目的地は屋上から、保健室へと変更となった。

「あれ……悠志君と優奈ちゃん？ 始業式はもう終わったの？」

先生は、私たちの姿を見つけるとそう声をかけてきた。相変わらずポワポワとした雰囲気を漂わせている先生だ。マジ天使！

「はい……私の中ではすでに、エンドロールが流れています」

私はキリッとした顔で答えた。悠志が隣で笑いをこらえている。

「えッ！？ 早く始業式に行ってください……今なら、まだ間に合います」

「……もう無理なんです。今さら戻れない！ もう取り返しが付かないんです」

「そ、そんな……先生と一緒に行ってあげるから……出頭しましよっ？」

本当にいい先生だ、冗談にまで付き合ってくれる。マジ天使！
そうこうしていると、さっきまで笑いをこらえていた悠志が先生に話しかけた。

「山田先生」

「悠志君……私の名前は、今田です！」

「すみません、山田先生」

「改める気なし!？」

「落ち着いて下さい。まだ焦る時期じゃない」

「そうね……焦りすぎていたみたいですよ……もう大丈夫、落ち着きました」

「やればできんじゃない」

「ぶっ飛ばしますよ」

先生は悠志の肩あたりをボスつと殴る。細腕から放たれるヒョロヒョロとしたパンチは、全く痛くなさそうだ。逆に先生がダメージを受けそうな危うさを感じる。

「うわーほねがおれた」

完全に棒読みである。当たり屋もびつくりの、演技力だ。

「唾をつけてれば治ります。お婆ちゃんが言ってました」

「でた、お婆ちゃんの知恵、この前、ドリフトはアウトインアウトが基本って、お婆ちゃん言ってましたよね？」

「言ってますん!!」

悠志が適当なことを言いながらそろそろと、保健室の扉へと近づいている。雑談の勢いそのまま保健室に押し入る気である。なんと

う力技。私は、先生が悠志に気を取られている間に、保健室へと入る。……暖かい、これは寝れそうだ。

「まあまあ……先生立ち話も何ですから、保健室に入りますか？
先生なら歓迎しますよ」

悠志がまるで自分の家に招くかのように、先生を保健室へと誘う。

「え？ いや始業式」

「さあさあ、遠慮せずに」

「え？ 遠慮？ えっ!？」

先生はだいぶ困惑しているようだ。悠志は先生より一足先に保健室の中へ入ると、私が座っているソファアの隣に腰掛ける。

「ふああ、ゆう、ちよつと詰めて」

「ムリ、こつちも結構限界」

このソファアは二人が横になって寝れるほど大きくはない、どちらかが横になるのを我慢し、なおかつ枕にならなければならぬ。

「じゃあユウがまくらね……」

「はいはい」

意外とすんなり了承してくれた。

私は悠志の膝に頭を置くと目を閉じる。一日以上寝ていなかったためか、目を閉じただけで意識が遠のいて行く。近くで先生と悠志の話している声も次第に遠くなり、私は、一日ぶりの眠りについた。

新しいクラス（後書き）

腐りかけの牛乳をヨーグルトに変えることによって、消費期限を伸ばそうという試みが失敗し、ふひひは軽い脱水症状に……

そんな時出会ったのがアクリアス、それは運命の出会い、その時は4歳でした。

その味は甘くて薄くて……

こんな飲み物を飲める私はきっと脱水症状なのだと思います
今、手元にあるのは腐りかけの牛乳……から造られたヨーグルトの
食べ残し

もちろんふひひが買ってきたのはアクエリアス
なぜなら、ふひひはまた腹を下したからです。

新しいクラス（前書き）

前回までのあらすじ！！

「リリカル、マジカル」

平凡な高校3年生だったはずの俺、高内悠志に訪れた突然の事態。渡されたのはダンベル。手にしたのは肉まん。クラス替えが導くその出会いは、偶然なのか、運命なのか……今はまだ、保健室にいるけれど……。俺と幼馴染とその他モブ、始まります。

「マジでやめてー!!」

新しいクラス

ユサユサと身体をゆすられている気がした。私は、きつと気のせいだろうという結論に、ボヤボヤとした意識の中帰着し、再び眠りにつこうとした。だがしかし、今度は耳元で蚊の飛ぶ音が聞こえてきたのだ。

人間というのは、無意識のうちに害虫となるような物の発する音を嫌うらしい。そのため私は、蚊に睡眠を邪魔されてしまうという、不愉快な現象をこの身で体験してしまったのである。

蚊の退治法で最もポピュラーなのが、叩き殺すだ。四の五の言わずに叩き殺していたのが、古き良き時代の日本人である。近年では殺虫剤なるものや、蚊取り《ブラッディ》スモッグ線香なるものがあるらしいが、現在手持ちに無いので説明は割愛させていただこう。

つまり、私が今できる蚊の殺害方法は叩き殺す出ある。気も整えないし、感謝もしない。ただひたすらに叩く！

「痛ッ！」

悲鳴を上げたのは私だった。自分で自分の頬を平手打ち、それは痛いに決まっている。最悪だ！　だが蚊の音はしなくな……。

「プーン」

これでまた眠りにつけるそう思った私が甘かったようだ。最悪だ仕留め損なつたらしい。

「プッププップーン」

もの凄くノリのイイ蚊もいたもんだ……拳を握りしめ、わりかし本気で殴った。だが普通に受け止められてしまった。

「バカ悠志！ ほつぺた叩いたじゃん！」

「ゴメン、まさか自分で自分を殴るとは思わなかった」

悠志はそう言うと、手を私の頬に当て摩する。

「イタいのイタいのトんでいけー」

赤くなっているであろう頬に、悠志の冷たい手が気持ちよいのだけれども。

「ユウ、そんなおまじないが効くとも？」

「知らねえの？ これ医学的根拠有るんだぜ？」

「そうですよ優奈ちゃん、バカにしちゃいけませんよ……ッ」

先生は何やら、もの凄く真剣である。何をしているかと思えば、トランプで遊んでいたらしい。悠志の前にはトランプタワーが一塔完成していた。無駄に器用な悠志が作ったのだらう。そして建造途中のトランプタワーが先生の目の前に……完成まであと僅かといったところである。

「あれは土台が駄目だ……次のせたら崩れる」

悠志がぼそつと呟く。お前は匠か？　と言いたくなかったがあえて突っ込まず様子を見ることにした。

「ふう……悠志くん、トランプタワーを作れるのが自分だけだと、粋がっていられるのも今だけです」

「粋がってません」

悠志は冷静に否定する。先生は、プルプルふるえる指でトランプタワーの最上階を乗せた……緊張の一瞬。

見事に崩れた。やはり土台がダメ……私も最初からそう思ってた。

「あれ……お、おかしいなあ〜やっぱり湿度が原因かなあ〜湿度かなあ〜？」

先生はすべての原因を湿度に擦り付けはじめた。

「なんか湿度が足りない気がしてたんだよね〜やっぱり湿度だよ……間違えないよ。悠志くん湿度だよ」

「ゆう……あんな大人にならないようにしような」

「そうね……あんな大人にだけは、ならないようにしよう」

「やめて!?!?……そんな目で見ないで!」

「じゃあ先生、約束どおりジュースいただきますね」

悠志はそう言つと保健室にある保冷温庫を漁る。この季節だと温かい飲み物が入っている。

「午前の紅茶に……紅茶葉伝、アクアリアスにポカリスアット……なぜ温めたし」

「意外と美味しいんです！」

「先生、この魔法瓶は？」

「えっと……ホ　ラ」

何を言ったのか聞き取れなかった。私でも聞き取れなかったのだから。保温庫を漁っている悠志はなおさらだろう。

「先生……もしかしてヤバいものでも入ってますか？」

「うう……ホ、ホットコーラです！」

「えっ……コーラ……ホット？」

思わず呟いてしまった。先生がこっちを見ている。

「おいしいのに……みんな信じてくれない」

いじけてしまった。これは飲むしか無いパターンである。

「ユウ、ホットコーラを……」

「マジで……」

悠志の顔がひきつっている。大丈夫、悠志が前に作った、コーラ

煮はおいしかった。だったらホットコーラもおいしいはず。中に肉が入っているか入っていないかの差のはず。

「よし、ゆう頑張って飲めよ」

「な、なんでよ!? 一緒に飲んでくれないの?」

「おいしいのに……」

三つのコップに注がれたホットコーラ……未知への挑戦、悠志は臭いを嗅いでいる。まず先生が飲んだ。

「……ほう……おいしい」

ゴクリと唾を飲み込む。次は私達の番だ……先生の味覚が狂ってなければおいしいはずである。だが、私にはただ甘い砂糖水を飲むビジョンしか見えない。悠志と目線をかわし、意を決して一口……

「ああ……なるほど〜なるほど〜」

「……ユウ、言いたいことはわかるよ」

「おいしいですよね?」

本当にああ……なるほど〜としか言えない味がする。飲めなくもないが……ひたすらに甘い。甘い甘い。いつかきつと糖尿で苦しむことになるだろう。

外からは始業式が終わったのか、ざわざわとした音が聞こえてきた。もうそろそろクラスに戻ってもいいかもしれない。

ホットコーラを一気に煽ると私と悠志は席を立った。先生に
ごちそうさまでしたとお礼を言い保健室を出る。先生は二杯目を飲み
始めていた。

新しいクラス（後書き）

久々の更新となりました……もっと早く更新しようとは思ってたのですが……申し訳ない
次話から新キャラ登場です

多分!!

新しいクラス（前書き）

最近ツインテイル派から
ポニーテイル派になった
ふひひです

全世界の妹系アイドルに告ぐ……ツインテールにしたらいっても
んじゃねえぞ！！ゴルア！！

新しいクラス

口の中がホットコーラによって、デルンデルンになってしまった私と悠志は、購買で飲み物を飲むことで、状態異常を回復させ、その後教室へと向かった。

教室に向かう廊下には、人っ子一人見当たらない。

もしかしたら今日は休みなのかもしれない……だから帰ってもいいのかも！！　と想着てしまった私は、全く悪くないはずである。……結局、誰一人とも合うことなく教室へと着くこととなった。売店で時間を使いすぎたらしい。

ホムルームが始まっている可能性がかなり高いと言うより、始まっている。

中から先生の話す声が聞こえている。

「ユウ……もしかしてやばい感じ？」

「いや、まだ……遅刻したとは決まっていない！」

そんな馬鹿な……何処からどう見ても遅刻である。悠志は現実を直視できないらしい。

「ユウ、つらい現実から目をそむけることが出来れば楽だよ……でもね、そんなコトをしたら貴方は成長できない……大丈夫、私がついている……私は後ろの扉から入るから、ゆづは前から入って先生に怒られてきなさい」

「ゆう……優しいな」

悠志はそう言って私の腕をつかみ、ズルズルと引きずりながら、教室の扉へと近づく。

「離せ！ 私は怒られたくない！」

「大丈夫だ……日本には、一蓮托生という言葉があるんだ！ 何も心配いらない」

「心配すぎてハゲる！」

「ハゲても可愛い、大丈夫、よし行くぞ」

「全然大丈夫じゃない！」

大丈夫などと、何処からそんな根拠のない自信が生まれるのだろうか？ 学校が始まって早々、説教なんて喰らいたくはない。

そんなコトを思っているうちに悠志が扉をガラッと開けてしまった。教室にいる人々から一斉に視線を向けられる。うっわぁ〜これは……視線が痛い。

「アブねえ……ギリギリセーフか。危うく遅刻するところだった」

悠志は無謀にも、ぎりぎり間に合ったアピールをしている。

「……高内と三井、今まで何処にいた？」

教壇に立っていた先生が声を上げた。よく見れば学年主任の武田

健二である。今年の担任はなかなか厄介そうだ。

「えっ？ 始業式だったんですから体育館に決まっていますよ」

悠志がさも当然であるかのように答えた。

「ほお……それにしては、見かけなかったな……そうだな、校長先生が何をおっしゃられたか答えられるか？」

体育館にいなかった悠志と私では絶対に答えられない問である。キタナイ！ 流石学年主任キタナイ！ だが悠志は間髪入れずにサラッと答える。

「皆さんおはようございます！」

「むう……」

悠志のドヤ顔が決まった。現代に生き返った一休さんである。まさかそんな返答の仕方があったとは……無駄に頭の回転がいい、きつと先刻、糖分を補給したお陰である。

「くやしいのお〜くやしいのお〜」

私は小声で、担任の心の声なるものを演出してみた。私のすぐ近くの席の娘が何やらむせていたが、私のせいではない。

「……もういい、席に早くつけ」

諦めたらしい。ここで机に手をのせて『席についた』などと宣ったものならば、雷が落ちるだろう。火に油を注ぐ真似はしない。私

は自他ともに認める慎重な女だ。

教室を見回すと、奈緒がニヤニヤしながら此方に手を降っていた。私も手を振り返す。数名の男から鬱陶しい視線を感じるがシカトする。

霧島公太が悠志の足を引っ掛けようと足を突き出し、逆にスネを蹴られて悶絶している。相変わらず残念なやつだ。

今日から一年間このクラスで過ごすことになる。今年はどうな年になるのか……ロマンチックが止まらない。

新しいクラス（後書き）

ポニーテイル！！馬の尻尾！！

新しいクラス（前書き）

どうもふひひです

日常パート書くのが思った以上に難しい

日常ってそんなに面白い事ってないし……

やり過ぎるとただの問題児だしwww

前回までのあらすじ

これは鈍器のようなものです
いいえ肉まんです

なん……だと!?

新しいクラス

席について黒板を見てみると、どでかい字で『武田健二』と書いてある。自己紹介中だったようだ。

「ええ……話が途切れたが、今年は受験がある。皆の進路がより良いものになるよう、担任として協力いきたいと思う。一年間よろしく！何か質問はあるか？」

真面目な自己紹介だった……これの邪魔をしたという罪悪感を、悠志は感じるべきである。私は、必死で抵抗した。私は悪くない。そうこうしているうちに、生徒たちによる質問が始まった。

「先生、彼氏は？」

「妻もいるし、娘もいる……次」

「娘さんを下さい！」

「やらん……次」

「初体験は？」

「黙れ……次」

「バナナはおやつに」

「入らん……次」

「カレー味のウンコと」

「次」

「流された……だと！？さすがにトイレでウンコは、流す派か……」

これはひどい……まともな質問がまるでない。そして、慣れた作業のように受け答えするあたり、毎年恒例なのだろう。

結局まともな質問が出ることなく、收拾のつかなくなった質問タイムは、終わってしまい、生徒たちによる自己紹介、そして係決めだ。

此処で、楽な委員会や、係になることによって、いかに有意義に学校生活をおくれるかが決まるのだ。

目指すは図書委員会……図書館には司書さんがいるので、図書委員にはほとんど仕事が無い。時々ある読書週間の時、図書館から教室へ本を運ぶだけの簡単なお仕事である。

「まずは学級委員からだ……誰かいないか？」

担任が教室をぐるりと見渡す。皆、担任と目が合わないようにサッと目を逸した。

いるわけがない、生徒会ならまだしも、学級委員になったからといって、正直、メリットというものがあまりない。評定さえ良ければ推薦はもらえるのだろうし、面倒事を避けたいのは皆一緒である。

何が楽しくて学級員などをやらなきゃいけないのか……常識的に考えてハズレくじだ。

「仕方ないな……遅刻してきた三井と高内やれ」

かわいそうに……遅刻してきたばかりに学級員にされた三井と高内……ん？

「ええ！？ ゴジョウダンヲ？」

「三井、残念ながら冗談が苦手だな」

「冗談ではないらしい……冗談じゃない！ 高校最後の年、暗雲が立ち込める！ どころの話ではない。高校最後の年、スーパーボールケーンが噴火した！ くらいの異常事態だ。未だ黙ってはいるが、悠志がなんとかするに違いない。私は期待を込めた視線を悠志に向ける。」

悠志はご丁寧タオルを机に敷き、突っ伏し爆睡していた。

「寝んなー!!」

思わず叫んでしまった私は何も悪くない。おかげで悠志も目を覚ましたらしい。

「高内……初日から爆睡とはいい度胸だな」

「え？ 寝てません、半目でした。そう確信しています」

悠志は少し寝ぼけているのか少し意味のわからない弁明をしている。

「お前と三井に学級員をやってもらおうと思っている」

「イヤイヤイヤ、ちょっと待ってください。どうして俺達ですか？」

「遅刻しただろ？」

「してません。仮に百歩譲って遅刻したとしても、学級員はその罪としては重すぎます。図書委員もしくは美化委員が妥当だと」

無茶な交渉をやりだした。頑張れそして取り戻せ私の青春を！

「……応援団やるか？」

「学級員やらせて頂きます！！」

クツソ！ ヤラれた……誰が応援団など……この学年主任、皆がやりたくない係を熟知している……体育祭など強制参加種目だけ参加して、見学に徹するのが正義なのだ。

「では、二人前に出て、司会進行、よろしく！」

私と悠志はブツブツ言いながらも教壇へ向かう。

「ゆう、進行お願い、私、書記やる」

「分かった」

毎年この係ぎめは時間がかかる。皆、楽な係りに殺到するからだ。先が思いやられる。

「まずは応援団から……誰かいませんか？」

悠志が教室を見渡すが、皆目を逸す。

「では俺が決めます」

「ええ！？」

皆が驚きの声を上げ、ざわざわとした。

「悠志横暴だぞ」

霧島ハムが悠志に文句を言い、数名の男がそれに同意したように、合いの手を入れた。

「ユウ、ハムと石本と木村、応援団に入れていいよ」「オツケー」

「……すみませんでした!!」「……」

悠志あくどい。文句を言っていた声が一斉にやんだ。皆、応援団はやりたくないらしい。

それもそうだろう、体育祭があるのは五月の後半つまり、ゴールデンウィーク期間中に応援団の練習のため、時間を取らさるという嫌がらせを受けるのだ。部活をやっている者は、総体前の重要な時期にそんな事やっていられない。

秋にヤラないのは受験があるからだろうし、秋にある文化祭でも、三年はクラスで何かをやるといっようなことはないのが、毎年の流れである。

さてどうするのか……。

「仕方ないのでアミダします」

結局あみだくじらしい。妥当だろう。学級員になったのは予想外だが、何とかやっていけそうな気がするそんな新学期。

新しいクラス（後書き）

お腹痛いWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8858u/>

俺と幼馴染とその他モブ(仮)

2011年11月15日21時08分発行